
青い空が好きだった

真坂たま

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

青い空が好きだった

【Zコード】

Z8564Z

【作者名】

真坂たま

【あらすじ】

人工知能のトーマは宇宙船に載せられ長い長い果てのない旅へとでかける。「彼」の知能の育成を担当するミチコは一人きりで宇宙に旅立つ。「彼」に密かなプレゼントを用意した……

昔、昔、漁師が浜を歩いていて、壺を見つけました。

壺には栓がしてあつたので、漁師はその栓を抜いてみました。すると、中から煙と一緒に魔人が現れ、漁師に向かつていました。

「壺から出してきてありがとう。お礼にお前を殺してやろう」

漁師が驚いて訳を聞くと、魔人が言いました。

「俺は神様にこの壺の中に閉じ込められた。最初の千年、俺はここから出してくれた人間を大金持ちにしてやろうと思っていた。次の千年、俺はここから出してくれた人間を世界の王にしてやろうと思つていた。

そして、次の千年、俺はここから出してくれた人間を殺してやると思つていた。そしておまえが出してくれたという訳だ……」

「そいつはひどいな」

そこまで読んだところでトーマが声をかけてきた。

「感謝されるのが当然だろ、殺されるつてのは……」

「トーマでもそう思う?」

本から顔を上げてミチコ・クルーはトーマの声が流れてくるスピーカーのあるらしい方へ視線をやつた。

そこは今は白い雲がゆつくじと流れる青空になつていた。トーマの好みの映像だ。

「俺だつたら、俺の命を賭けてもその人間を助けてやるのにトーマの声はむきになつて響く。

「で、その漁師はどうしたんだ?」

ミチコは本のページをめくつた。薄くビニールコーティングされている紙が偽りの太陽に光を弾く。ずっと先の未来では本などなくなり、すべてマイクロ・フィルムに記憶される、という小説もあるが、二〇一五年現在では、まだ、人々は紙をめくる快感と離ががたいら

しー。

「予測してみれば?」

空の映像が少し変わる。雲が多くなつて風が出てきた。

「わからねえよ」

「嘘ばつかり」

ミチコが言つた瞬間に、トーマの中では数百にものぼる解決策が
出された筈だ。だが、あえて答えない、この知能の高さを…

「はやく続きを読むよ

「はこはこ」

ミチコは大きな椰子の木のイメージが投影されている壁に、背を
もたせ直した。

「俺はミチコの声が好きだな」

トーマがささやいた。

「じゃあ、トーマの声を私と同じに組む?」

「ばか

再び晴れた青い空。その真ん中からトーマの声が笑いながら下り
てくる。

「ミチコの声だから、好きなんじやないか」

「『TOM-A』の調子はどうだい?」
ミッシュ・ラン・ルームへ戻ると、主任のエディットが声をかけてき
た。

「順調よ。何も問題はないわ。あ、私にもコーヒー

「そっかな」

祖先に二ホンの侍を持つといつ、しかし、外見はまつたくゲルマ
ン系のマツムラ博士が首を傾げる。

「『部屋』での君と彼の会話を聞いていたが、私は恋人どうしの会
話かと思った

「……！」

色素の薄いミチコの頬がさあっと赤く染まる。

「トーマは感情表現が豊かなだけよ」

「『TOM-A』だ」

マツムラ博士はそつけない。

「TOTAL Operation system MAN-MANDE。世界初の外宇宙探査船のコンピューターだ。なぜあれ程の感情教育が必要なのか、私には理解できない」

「未知の文化、システムに出会った時の柔軟な発想、合理的な対応。危険・故障の回避。その他さまざまな衝撃に出会った場合の地球人

的シミュレーション……」

ミチコはまだ続けようとしたが、マツムラ博士は手を振った。

「もういい、マニュアルは読んでいる」

「始めたのはマツムラよ」

エディットが一人の間にわって入ってテーブルにコーヒーを置いた。

「ま、痛みわけ、と言つことで」

古い言葉を使ってみせる。

「俺としてはトーマの言葉使いがいたさか乱暴なことが気にかかるけどな」

「個性的、でしょ。大丈夫よ。私以外の人間にはあんなふうにはしゃべらないから」

笑つて答えるミチコに、マツムラ博士はまたちょっと眉をしかめた。「勿論、ミチコにしてみれば、あの言葉も含めてここまで教育したのだから愛情があるのかもしれない。だが、機械にまでそれを持たせるのはどうか、ということだ」

「マツムラは妬いてるのさ。ミチコが『TOM-A』にかかりつきりだから」

ちやかすエディットを軽くにらんで、ミチコはマツムラに向かって言つた。

「確かにトーマは感情表現が大げさかもしれないけど」

ミチコは穏やかにほほえんだ。

「彼は表現しているだけ。言つてみれば真似をしてるのかな、人間の。彼に本当のところの感情といつもの……愛情も……存在はないのよ」

「マジムラにトーマつて呼んじゃいけない、つて言われたわ

「じゃあ、なんて呼ぶんだよ？」正式名称で？

『TOM-A』が設置してある場所は単に『部屋』と呼ばれている。トーマの好みでいろいろな映像が流れるその場所は、実際は『TOM-A』の四メートルに及ぶ巨体を維持する、さまざまな機械やコードに埋め尽くされている。今は砂浜の映像となっている場所にも、接続線が降ろしている腰にゴロゴロとあたる。

映像は『TOM-A』が造る。未知の異文化に出会った時、地球を紹介するために『TOM-A』の中にはさまざまな場所の風景が記憶されている。その中から好きなものを選んでホログラフにしてみせるのだ。田の前で碎ける波の質感、量感は見事で、潮の匂いさえしてあそぶだ。

ミチコは寄せる波に手を浸した。もちろん、濡れはしない。

「どうしたんだ、ミチコ」

「え……ああ……」

ミチコは窓に向かってニッコリと笑った。

「この映像もしばらくしたら見れなくなるな、と思って」

「そうだな、俺が旅立つ日まで、あと四日と十一時間三十四分」最後の数字を言つ時だけ、コンピューターのような感じになつた。

（……よつな？ トーマはそのものじやないの）

ミチコは自分の思ったことに苦笑した。

「さびしくなるわ」

「俺のいなくなるのが？ それとも映像が見れなくなるのが？」

「ばか」

虚像の椰子の木にもたれてミチコは怒った顔をつくる。

「トーマがいなくなるのが、に、に、決まってるでしょ」

波頭が白く泡立ち、駆ける馬の脚のよつに崩れて寄せた。美しい

ビーチは日差しに輝き、広く遠く静かだ。

「俺も……寂しい。ミチコと別れるのが

ぱつん、と言葉が放り出された。

「たった一人で宇宙の中を彷徨うんだ。未知の文明、異なった生命

を求めて。確率の低い、当てのない旅……」

太陽が少しかげる。海の色が深くなつた。

「冷たくて……透明で、深い……死んだような世界の中……」

「トーマ」

「ミチコ……」

言いかけたミチコの言葉をトーマがさえぎつた。波はさつきより少し高くなつてゐる。風が……出てきたのだろうか。

「ミチコと学習するのはとても楽しかった。ミチコはいろいろなことを俺に教えてくれた。感情も……そうだ。だけど、俺は今後悔している。そんなものを知つてしまつたことを

「……」

海は灰色だ。うねる波は粘土のよつに重く、厚い。トーマの声はミチコの耳に悲しく響いた。

「長い時間の中で、ミチコもこつかいなくなつてしまつただろうな。俺をおいて……」

「トーマ……」

海の表面に細い輪がいくつも出来る。体に感じない雨が遠い空から降ってきた。

ミチコはエディットと共に旅立つ日を待つ、外宇宙探査船の最終

チェックに出かけた。

『TOM-A』が頭脳なら、この船は彼の体になるのだ。

「『J』に『TOM-A』を納めることになります」

所員に案内された場所はただの空間だった。『TOM-A』を設置するためだけの、機能的で、無機質な。

（死んだ空間）

軽くついたため息を田聰くエティットが見つけた。

「どうしたんだ」

「ああ いえ 」

ミチコは微笑した。

「J」が彼のリビングになるところのこと、愛想のない部屋だと思つて

「確かに」

エティットも笑つた。

「壁に女の子のポスターも貼れないし」

「トーマの中の映像を映し出して見ることもできない

（気の遠くなるような年月をたつた一人 退屈を紛らわす術もなく）

ミチコの耳にまたトーマの声が甦る。

（感情を持ったことを……後悔している ）

（

いよいよ明田は『TOM-A』を口ケットに移植するところ、田川、ミチコはやはりトーマの『部屋』にいた。

「昨日、船を見に行つたのよ」

「ああ、シンプルな奴だよな。あまり俺好みじゃない

「トーマの好みっていうと、サイドにネオンでもつけるの？」

「そりゃいいな。科学連が許してくれるっていうなら

今日のトーマの選んだ映像は、澄んだ空の下に広がる草原だった。足元をサワサワと草がたなびき、高く雲雀も舞い上がる。

「それより、今日はミチコに見せたいものがあるんだ

「あら、何？」

「まあ、見ててくれよ」

ミチコの田の前の空間がコラコラと揺れ出した。何か、新しい木ログラフを出現させるつもりらしい。ミチコが見ている間にそれは人の形をとり出した。

「……トーマ」

ミチコの目が大きく開かれる。

そこに一人の青年が立っていた。空気の中から生まれた彼は、夜色の髪と宇宙の星のような瞳を持っていた。

「……どうだ？」

少し不安そうな顔をして、彼は口を開いた。

「トーマ……？」

「ああ」

声はその人間の唇から出でているように聞こえた。

「気にいる顔がなかなか造れなくてな、声からはこいつたから。……

ミチコはこんな顔嫌いか？」

「あ……いえ、なかなか……ハンサムじゃないの」

「そうか？」

青年の顔が子供っぽい笑みを浮かべた。無邪氣できれいな顔だった。

ミチコはゆっくりとトーマの映像に近づいた。背の高い草の中でミチコを待つトーマは、心もとなげな一人ぼっちの子供のようだ。

「トーマ……？」

伸ばした手は、しかし、トーマを素通りする。

「実体も、欲しかったな」

トーマも手を伸ばしてミチコに触れようとした。お互いの手は握ることもできず、ただ宙に浮いただけだ。

「ミチコを……感じたかった」

「トーマ……」

トーマはちょっと笑つて一步引いた。

「俺もバカだな。一生懸命創れば奇跡でも起きるかなんて、そんな

非現実なこと……」

「

「ミチコが読んでくれた本によくあるだろつ。可哀想な、善良な人間を神様が助けてくれるつて奴」

優しい風がトーマの黒い前髪を揺らしている。

「神様に祈れば奇跡は起こるのかな。人間を創つたのが神様なら、俺の神様は人間なのかな。人間に祈ればいいのかな」

「……トーマ」

「俺を人間にしていくださうつて。ずっとここに、ミチコと一緒にいたいですつて。神様、神様、神様……」

「やめて、トーマ」

ミチコは耳を覆つて首を振つた。トーマの悲しみがミチコを包む。穏やかな風景の中に潜むトーマの哀しみの感情を、ミチコは感じ取つていた。

（トーマに感情がないなんて思いこもつとしていた私……こんな、こんなにも悲しい風が……）

「すまん、お前を困らすつもりはなかつた」
「つづくまつてしまつたミチコの前に、トーマが膝をついた。

「どうして……？」

ミチコは顔を覆つた手の下から言つた。

「どうしてそんなに……優しいの……？ 私たちはお前をたつた一人で宇宙に放り出そうとしているのに」

「俺は……帰つてくる」

「

トーマの言葉にミチコは顔を上げた。涙が頬を濡らしている。トーマは指でその涙を拭うふりをした。

「夢物語だがな……この宇宙のどこかに、きっと進んだ文明を持つ星がある。俺はそこに辿り着き、地球に戻つてくる。人間になつて……」
「ミチコのところに……」

「トーマ……」

そんなことを一番信じていないのは、トーマ自身だところが「まち」
「ミチ」にもわかつていた。

「「めん……トーマ……」」めんなさい」

「ミチ」」

ふつと太陽がかげつた。草原も、青空も消えていた。『部屋』は
『部屋』に戻り、そこにはコードやシステムに囲まれた『TOM -
A』と、映像のトーマだけが残されていた。

「トーマ」

「もう、こんなお遊びはやめる」

「」

「これが俺だ。超大規模集積回路の固まりで、金属とプラスチック
とセラミックに包まれている。人間の指先のスイッチひとつで俺は
眠り、起き、考える」

トーマの映像は『TOM - A』の表面に触れた。

「固定記憶の操作でミチにに関する記憶を抜くことだってできる」

「トーマ……」

「もちろん、そんなことしないけどな」

トーマは笑つた。泣き笑いのようだった。

「さよならだ、ミチ。これ以上俺の前にいないでくれ。つらい
……からな」

「……トーマ、ひとつだけ教えて」

ミチはトーマと『TOM - A』に近づいた。

「感情を持ったことを……後悔しているの？」

「」

トーマの姿が少しずつ薄れ始めた。『TOM - A』に重なつて、
吸い込まれるように。

「後悔はしないよ」

それでも声だけははつきりと発せられる。

「後悔なんかしてない。ミチを好きになつたんだから」

「トーマ」

『ミチ』は腕を広げて『TOM-A』とトーマを抱き締めた。冷たい金属の壁の感触を、身体全体を感じた。

「お前のこと、忘れない。必ず戻ってきてちょうだい、地球上に、私のところ……」

「ミチ』……」

透き通ったトーマの映像は、『ミチ』の腕の中で一度目を見開き、やがてそっとその夜の瞳をまぶたの下へ閉ざした。

「ああ……帰つてくるよ……ミチ』」

「トーマ……」

トーマが出発するとこの日の朝、『ミチ』は探査船の技術者と押し問答をしていた。

「だから、このホログラムを『TOM-A』のコントロール・ルームに設置させてくれ、と言っているだけじゃないの。何も船に危害を与えるものじゃないわ。『TOM-A』の意志でスイッチが入るだけなんだから」

「しかし、どんなものでも、予定にないものを乗せる訳には……」

「この、わからずや！」

掴みかかるつとある『ミチ』の肩を引つ張つたのはヒティットだった。

「落ち着けよ、ミチ』」

「だつて……」

「なあ、兄弟」

ヒティットは技術者の胸をこすいた。

「一人つきりで宇宙の旅だ。どんなに退屈かはお前さんにもわかるだろう。コンピューターだつて同じさ。ましてや『TOM-A』の知恵は人間以上なんだから。ここつがある方が航海がうまくいくっていいうなら、そのへりの融通をかせろよ」

「しかし

「

「上の許可は貰つてゐるよ。確認してみるか」

「エティット」

驚いたのはミチコの方だった。それにエティットは戸口をつぶつて笑つてみせた。

「ミチコ、おまえももう少し筋つてものを通せよ」

結局、ミチコの造つたホログラフ・ボックスは『TOM-A』のコントロール・ルームに運び込まれることになった。今は『TOM-A』で埋め尽くされ、狭さを感じる程の部屋に、その銀色の小さな箱は、もとからあるべき物のように置かれた。

『TOM-A』の部屋は微かな電子的な唸りと振動に満たされ、いかにも機械の箱のようだ。認識していないのか、部屋に入ったミチコに『TOM-A』は何も語りかけなかつた。

全地球の人々が見守るつゝにロケットは発進した。一度と戻らぬ宇宙への旅に、未知へのあてどない旅に。

「エティット」

「ああ？」

消え去らぬ発射煙を見ながらミチコは隣に立つ男に声をかけた。

「あのホログラフが何だったのか、聞かないの」

「ああ」

エティットはミチコを見て、また空へ目をやつた。

「お前とトーマの会話を聞いていたからな。俺もあいつを宇宙へ放り出した人間だ。してやれることぐらいやつてやるさ。おまえはトーマによかれと思つてやつたんだる」

「少しほ慰めになればと思つて……」

「あのマツムラ博士が局長の首を締め上げてどなつたところを見せてやりたかったよ」

「……」

「つむじていたミチコの目の前に白いハンカチが出された。それ

でミチコは自分が泣いていたことに気づいた。

「ありがとう」

ハイジットはそっぽを向いていた。

ミチコはハンカチを握つて、それでも涙は拭かず、じっと天の果てを見つめていた。

船は順調に進んでいた。直に地球と交信不可能な距離まで達した。ここから先は、本当にトーマ一人だった。

トーマはミチコが自分の中に入ってきたのを識っていた。彼が何か箱のようなものを設置していったことも。それは、トーマの意志で動かすことが出来た。

トーマはそれを作動させてみた。銀色の箱は小さくカチリと音をさせ、その機能を動かした。

(……ミチコ)

それは小型のホログラフ投影機だった。狭い部屋の中に、小さな青空が映し出された。そして、その下に立つミチコの姿……

(ミチコ……)

ミチコは、笑っていた。時々それは失敗して、泣きそうな素顔が覗くこともあった。青い空の下で、ミチコはトーマに向かってだけ笑いかけていた。

(……ミチコ……ありがとう……)

いつかひとつ……トーマは今は夢を見ていた。

いつか……時分の望みを叶えてくれる異文明に出会う。ひとつ……地球へ帰つてくる。

ミチコに会うために……ミチコを生み、育てた地球に帰つてくる。いつか……ひとつ……

太陽系のはずれ、冥王星上空を浮遊している偵察衛星が、最初の異変をキャッチした。急を告げる信号は、アステロイド・ベルトのどれかに設置された中継機器を得て、十一時間遅れで地球本星、及び月、火星のコロニーのメイン・コンピューターに送られた。

それは巨大な流星群の襲来を告げていた。どこからやつてきたのか、幅一〇〇キロにも及ぶ無数の岩の塊が、約四〇キロ／宇宙時間のスピードで、地球めがけて飛来してくるのだ。

太陽系にちらばる人類は、その調査も、迎撃も、避難すら順調に行えず、流星群に飲み込まれた。

時に、西暦三〇〇六年。最初の外宇宙探査船が地球を出発してから九八一年たつていた。

ガニメデ・コロニー	生存率	32・05%
火星ベース	生存率	26・13%
フォボス・エリア	生存率	03・87%
月エリア	生存率	13・97%
人工スペース・コロニー1、2、3	生存率	08・66%
地球	生存率	09・12%

流星群の襲来のせいで、すっかり地形が変わり、荒れ果てた土地を、一人の男が杖をつきつつ、彷徨つていた。

彼の頭上には、灰色の流砂がうずを巻いていた。流星群が地上のすべてのものを壊滅させた時に巻き上げられた粉塵が、いまだに空を覆っているのだ。

男はもう二か月も他の人間に会つていなかつた。この地上には自分一人しかいないのではないだろうかと、絶望にうちひしがれていた。

そんな時、男は奇妙なものを見た。それは金属の光沢を持つ、流線型の建造物だった。明らかに人工的なそれに、彼は救われた気持

ちになつた。あそこにいけば、人間がいるかもしれない。

男はもつれる足で必死に走つた。蜃氣楼のようにそれが消えてしまわないよう。パイプを切つて作つた杖が、石に当たつて耳障りな音をたてた。

近くによつて、男はそれが今まで見たこともないような建築物だということに気づいた。外壁は地球上では見られない金属で覆われている。入り口らしいものはなかつたが、触れているとぽつかりと壁に穴が開いた。

人一人入れる大きさに、男は誘われるようになへとはいつた。建物は、中も複雑な機械で埋め尽くされていた。男は元エンジニアだったので、その機械を興味をもつて見た。だが、どれも男の理解の範囲を超えていた。

(誰だ……)

突然、機械の中に声が響いた。男は驚いて振り向いた。すると、そこにいつからいたのか、一人の青年が機械に腰を下ろして男を見つめていた。青年は黒い髪と、夜の色の瞳をしていた。

「君は……？」

(俺はトーマ…… おまえはミチコを知つてゐるか?)

「ミチコ?」

(俺は一〇一五年にミチコと別れた…… お前、ミチコを知らないか?)

男は目を細めて青年を見つめた。頭がおかしいようには見えなかつた。大きな瞳には深い孤独がにじんでいた。

「……今は三〇〇六年だ。その、ミチコとかいう人間はとつぐの昔に死んでしまつてゐるよ。君は何だ? 人間か? それとも……」

(俺は外宇宙探査船のコンピューターだ)

トーマは夢を見ているような口調で言つた。

(一〇一五年に地球を飛び立つた。目的は未知の惑星の発見、異文明との接触、友好的外交……俺は長い長い間、宇宙の中を彷徨つた) 宇宙の中をどこまでも進んだ。人間なら気が狂う程の時間を孤独

の中に生きた。俺の体も時間の中で疲労し、隕石や宇宙線の影響も受けた。それでも俺は自分の意志を持ち続けた。

（俺は地球に帰るんだ。地球に帰つてもう一度ミチコと会つんだ）

最初の一〇〇年、俺の意識はそう繰り返していた。

（地球へ……もう一度地球へ……）

次の三〇〇年、宇宙塵との接触によつて集積回路の一部が破損したが、俺の意識は明らかだつた。

（地球へ……地球へ……）

それから四〇〇年の間、俺の中である意識が固まつた。そして旅立つて九〇〇年の後、俺はついに異星人と接触した。

その種族は非常に高度な文明を持ち、今はもう肉体の殻を捨て、意識と知識の海の中で宇宙全体を見つめているのだ。

彼らは俺の意識と感応し、旧式な機械でただ一人、旅立つたコンピューターの孤独を識つた。それは意識の集合体となつた彼らには体験できない感覚だつた。

素早く友好的に二つの文明は情報の交換を終えた。異星人は俺をひとつ生命体と認め、目的を果たした俺に望みをかなえてやろうと伝えた。

俺はためらうことなく自分の望みを打ち出した。彼らは俺の体を修理し、地球への軌道を弾き出した……

「そうか、それで君は帰つてきたんだな、この星へ」

（そうだ）

「だが残念だつたな、君の待ち人は九〇〇年も前に死に、地球は見る影もない。人間も他に生き残つてゐるかどうか」

（……）

「がつかりするな、君の持つてきた知識でまた地球が甦るかもしけないし……」

言いかけて男は口をつぐんだ。顔を伏せているトーマの肩が震えているのだ。泣いているのか？ と男は思つた。だが……

(望み通りさ)

トーマは泣いてなどいなかつた。彼は笑っていたのだ。肩を震わせ、声を上げて。

(これが俺の望みだつたのさ。地球へ流星群をつれてきたのは俺だ。地球の人類を、地球本星を破壊したい、その様を見たいというのが俺の望み)

「な、なに?」

(俺を宇宙へ放り出した、地球人に対する、これが俺の復讐。ミチコももう俺の手の中にいない。永遠に失われてしまったのに、なぜほかの人間が生きていなきやならないんだ。ミチコがいななら俺には何の意味もない。残つてているのは憎しみだけだ。この憎悪を、悪意を、俺は失わないよう繰り返し、インプットし続けた。これだけが俺の正気を支え続けた。これだけが、俺の旅の目的だつた!)

「き、貴様つ!」

男は手にしていた杖を振り上げていた。トーマは黒い前髪の下からそれを見つめていた。避けようともしなかつた。

振り上げられた杖はしかし、トーマの体を素通りし、その下の機械に打ち込まれた。杖はナイーブな機械に確かな衝撃を与えたらしい。一斉に船の中の機械が悲鳴を上げだした。

男は攻撃をやめなかつた。機械が煙を吹き、火花を上げても杖を打ち下ろし続けた。トーマは黙つてそれを見ている。

男の杖がある物を床に落とした。それは銀色の小さな箱だつた。落ちたショックで作動したのか、カチリとかすかな音がして、薄く映像が映し出された。

(……ミチコ……)

トーマの宇宙色の瞳がほこりがぶ。

(ミチコ……)

トーマはそのホログラフの側に膝をつく。

(帰つて……きたよ、ミチコ……)

やがて、トーマの映像も薄らいでいった。透き通った指でトーマはミチコに触れようとした。だが、それはかなわなかつた。トーマの姿は消えてしまつた。

破壊しつくして、男は息をきらして立つていた。気がつけば、床

の上に小さなホログラフが立つてゐる。今はもう見ることができない青い空と一人の女性の姿だつた。

その側に何か液体のような染みがあつた。

それは涙の跡のような、そんな形をしていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8564n/>

青い空が好きだった

2010年10月8日14時10分発行